

研究室から

鷗外・『澀江抽齋』ノート

——蕩児、優善について——

山崎 一穎

鷗外は澀江抽齋の伝記を書くにあたり、その人のみならず、その末裔まで綴った。これは『伊澤蘭軒』（その三百七十）で語っている如く、「前代の父祖の事蹟」に「其子孫の事蹟」が絡む故に、「組織全体を保存」し、「叙事を同世の状態」にまで及ぼしたいとの意図から発している。しかも、鷗外が抽齋その人の性情が必ずその子らへ「身的遺傳と並行して、心的遺傳が存じてゐなくてはならない」（『澀江抽齋』その十二）と信ずるからである。そして抽齋並びにその妻五百の美質が子らへ受け継がれてゆく様は、嗣子保や勝久に見ることができる。

しかるに抽齋の三度めの妻岡西氏徳の生んだ次男優善だけは、他

の兄弟姉妹と異っている。優善は嘉永四年六月十二日に、「十七歳で、二百石八人扶持の矢嶋玄碩の末期養子」となった。抽齋が四十七歳で、岡西氏徳の死後抽齋に嫁した五百、三十六歳の時である。優善の性行については「澀江一族の例を破つて、少うして烟草を喫み、好んで紛華奢靡の地に足を容れ、兎角市井のいきな事、しやれた事に傾き易く、當時早く既に前途のために憂ふべきものがあつた」（その四十二）と記されている。優善は父に似ぬ鬼子であつた。素行修まらず、遂に父抽齋は「忍び難きを忍んで」（その四十六）「座敷牢」（同）まで設ける。優善には塩田良三という棒組がいた。二人は「共に涓滴の量なくして、あらゆる遊戯に耽」（その四十七）り、常に「影の形に従ふ如く、須臾も相離るゝことが無」（同）いゝる、同志であつた。優善が松川飛蝶、良三が松川醉蝶と名告り、寄席に看板を懸けて役者の声色を使つたり、夏は墨田川に舟を浮べて影芝居をしたり、一かどの風狂三昧であつた。また、二人は町々の料理屋に出入し、吉原に遊び、借財ができると跡を晦ましてしまふ仕末におえない不良であつた。

安政三年優善は素行修まらざるために、「表醫者を貶して小普請醫者」（その四十九）に降下され、「抽齋も亦これが連繋して閉門三日に處せられ」（同）るといふ事態になつた。塩田良三も父の勘当を蒙つたのだが、抽齋はその良三を引取り食客に置いてやっている。これは「良三に幾分の才氣のあるのを認めたから」（その五十）であろう。同様に偏頗で、遊蕩の人森枳園の世話をしているのも、その才を愛しているからであろう。鷗外は「抽齋の森枳園に於ける、塩田良三に於ける、妻岡西氏に於ける、その人を持つこと寛宏なるを見るに足る。抽齋は契矩の道に於て得る所があつたのであ

る」(その五十九)と記している。抽齋の人柄が如実に窺われる所である。

抽齋が没した安政四年に優善は表医者に復したが、改後の情が見られず、それ故に「五百は且暮周密に其舉動を監視しなくてはならなかつた」(その六十五)。抽齋没後、五百は二歳で家督相続をした成善(後の保)と十二歳を頭に五人の子らの世話をし、その上優善まで心配りをしなければならなかつたのである。五百にとつて優善は先妻の子である。厳しく当れば、当然陰口を言われるであらうし、放任しておけば素行修まらず、その為心労はなはだかつたと思われる。

抽齋没後三年、文久元年に優善は「へ身持不行跡不埒」の廉を以て隠居を命ぜられ」(その七十一)るに至つた。その後山田塾で学問を修めるが、やがてそこを出奔し、吉原へ走るに至つては、五百の養父の比良野家では切腹させよとまで激怒する。五百は「自分も一死が其分であるとは信じてゐる。しかし晴がましく死なせることは、家門のためにも、君候のためにも望ましくない。それゆゑ切腹に代へて、金毘羅に起請文を納めさせたい」(その七十四)という。そして、優善に起請文を書かせ、それを持って金毘羅へ出かける。しかし、「起請文は納めずに、優善が行末の事を祈念して歸つた」(その七十五)のである。ここに五百の愛情が脈打っている。

しかし、維新を境に優善の運命も澀江家の運命も時代の波によつて変転する。優善が山田塾に入塾した頃、塩田良三も伊澤柏軒の塾でその才を愛せられ、明治元年浦和県の官吏になった。その後優善は塩田良三の推薦で浦和県出仕を命ぜられ、官吏の道を歩むことになる。時に三十六歳である。澀江家や日良野家が維新を境に没落し

てゆくのに反して、優善や良三は官吏となり羽振りも良くなって行く。ここに歴史の悪意を見ないわけには行かない。

維新後優善を優と改めた矢嶋優は、暇を得る毎に「浦和から母の安否を問ひに出て来た」(その九十五)。ここに五百の労苦はようやく報われることとなつた。「明治九年優は工部少屬を罷めて、新聞記者になり、魁新聞、真砂新聞等のために、主として演劇欄に筆」(その九十九)を執ることになった。何故、新聞記者になつたか、鵬外の筆は詳述していない。しかし、優の若き日の遊蕩が演劇面に花咲いたといえる。役人を罷めたのも、この若き日の夢と、身体にうづく風狂の血潮が押え難かつたためであらうか。

明治十六年四十九歳で優は歿した。鵬外は「優は蕩子であつた。しかし後に身を吏籍に置いてからは、微官に居つたにも拘らず、頗る材能を見た。優は情誼に厚かつた。親戚朋友の其恩恵を被つたことは甚だ多い。優は筆札を善くした。其書には小嶋成齋の風があつた。其他演劇の事は此人の最も精通する所であつた。新聞紙の劇評の如きは、森枳園と優とを開拓者の中に算すべきであらう。大正五年に珍書刊行会で公にした劇界珍話は飛蝶の名が署してあるが、優の未定稿である」(その百五)と記している。

父抽齋も劇通であつた。優は父の芸術方面の才を継承し、五百の訓育の結果、見事その才を開花させたのである。維新後没落して行く生活の中にあつて、五百の心苦は己れの妻子以上であつただらう。優も廻り道をしたが、それに応えたと云える。若き日の遊芸が実を結んだのである。優の自覚もさることながら、その転機となつたのが、かの棒組であつた塩田良三というのも面白い。

一体、鵬外は何故に蕩兒優善(優)を造型したのだらうか。優善

を通して、抽齋、五百の人となり語る事になつたのは事実である。しかし、優善その人が曲折を経て、己れの道を発見しえたその事に鷗外の視点が定まっている。優善がかつての放蕩無頼から身を立て、官吏としてその職責を完うしたのみであつたら、さほど鷗外も心を引かれなかつたであらう。塩田良三も官吏になつた以後の姿を鷗外は追つてはいない。優善が遊興にあつて、なお風狂を忘れず、その精神を生かした所に鷗外の目はある。すなわち、一旦その中に耽溺し、その真髓を劇評という芸術活動にまで昇華させた優善の精神活動を評価せずにはいられなかつたのである。

—一九七六・一・九—

正徹の歌

佐佐木幸綱

結論から先に書こう。正徹は、西行、定家と肩を並べて中世歌人のトップに立つ作品世界を実現した歌人である、との評価が、私の内部で徐々に定着しはじめて来たようだ。

『中世の歌人たち』と題する小さな本を書くために、このところ一年近く、中世和歌を集中的に読んできた。いわば門外漢である私

は、西行、定家、実朝、式子内親王といった、まあ、世評の高い歌人たちの作品や、新古今、玉葉、風雅等中世の主だった勅撰集は多少は読んでいたが、中世和歌の大半は未知の作品たちであつて、読み進んでゆく過程はかなりしんどいものであつた。が、同時に、未知の佳作に出遇い発見する喜びにひたれることも時にはあつて、しんどさが多少とも救われたりしたのであつた。その喜びを最も多く味わせてくれたのが正徹である。

正徹は、室町期の歌人である。弘和元年（一三八一）生、長祿三年（一四五九）、七九歳で没。能楽の大成者世阿弥元清より一八、九歳年下、一八歳の年に金閣寺が造営された、と言えば大よその時代がつかめよう。十代で出家し、興福寺、東福寺に勤務した禅僧歌人である。やはり十代の頃、冷泉為伊らを知り歌をつくりはじめたらしいが、冷泉派の論客、武家歌人として著名であつた今川了俊の最晩年の弟子となつて、本格的に短歌を勉強した。

正徹は、古典歌人の中で最もたくさん歌をつくつた歌人であるとしてよい。彼には、弟子の正広が編集した『草根集』という歌集があるが、そこには一万一千首を越える作が収められている。『私家集大成』に収録されている書陵部本には一一、二三七首という膨大な数の歌が収められている（万葉集の二・五倍、古今集の十倍、新古今集の五・五倍という驚くべき数である）。彼の歌論『正徹物語』によると、彼五十歳ちよつとの時に火災にあつて四十代以前の作二万七、八千首を焼いてしまったとあつて、それを加えると、これはもう大へんな数にのぼる。憑かれたように、狂つたようにというか、正徹が連日ひたすら歌をつくりつづけていたさまは、『草根集』をめぐつてみればわかる。